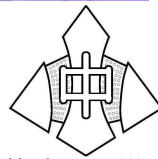


手をたずさえて

- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒



令和3年12月17日(金)発行
【発行責任者】郡山市立小原田中学校長 熊坂 洋

2年生

■ 太郎さんはよく「音楽で絵を描きたい」とおっしゃっているとお聞きしたのでビックリしました。私は元合唱部で美術部なのですが、「歌声とか音に色がついたらどんなに楽しい絵が描けるのだろう」と考えていました。そこで太郎さんの言葉を聞き、同じ考えをもって、しかもそれを実現させている！と衝撃を受けてました。ライブが始まると、ヴァイオリンの演奏では、弓で弦を弾くごとに鮮やか音が生まれてきて、それがつながって一つの線になったり、飛び散ったり…と生き生きと伸びやかに広がっていきました。また、それぞれの曲の違いで、情熱的な赤や黒、ポップな黄色や水色、さわやかな朝を感じさせる白や緑、深い深い感情を表す青…とにかく太郎さんの背景には、私の思い描いたものより百倍、千倍くらいの色と創造力が満ちあふれていました。太郎さんが見せてくださった絵は、私の人生の中で類を見ないほどに自由に圧倒的で私の夢見ていたもののひとつだったのではないかと思います。私もあんなふうに自分の思い描いたとおりに表現してみたいです。そして、どうやったら太郎さんのようにできるのか、少しわかったような気がします。ただ目の前にあるやるべき事に一生懸命に努力したり、まだチャレンジしていない事に挑戦してみることが大切なのだと思います。

■ 私は趣味でヴァイオリンやチェロなどの弦楽器のコンサート等に足を運ぶ機会があったので、ヴァイオリン一つだけでは物足りないのでは…と心のどこかでそう思っていました。しかし、太郎さんがヴァイオリンを弾いたとき、私はその音色に心奪われました。静寂に包まれた体育館の中、透き通っていてどこか力強い太郎さんのヴァイオリンの音に、その場にいた全員が耳だけでなく、心や体も引きつけられました。太郎さんの演奏は事前に屋の放送で流れていたのですが、生で聴く演奏は臨場感に溢れていました。軽快なリズムに始まり、人々の笑いを誘う日常の音、そして、うっとりとするなめらかなメロディー。間違いなくその時の体育館は、汚れなどない透き通った音に満ち満ちていました。私もすっかり太郎さんのファンになっていました。また、マキさんとの演奏は、ヴァイオリンとピアノの音が心地よく交じり合い、互いが互いの音を邪魔することなく、寧ろお互いの音を支え合い、忘れられない曲となりました。私はピアノ演奏をするので、いつかあのような心に残る音を奏でたいと思いました。

■ 私は、久恵先生と校長先生との4時間の特別授業と、太郎さんのライブを通して、「生きる」ことや「日常」とはどんなに大切で美しいものなのかを知ること、普段考えることのない「生きる」ということに目を向けることができました。特別授業では、自分自身が思う「生きる」を文字におこして、学年全体で言葉を紡いで2学年全員の「生きる」が完成しました。最初は当たり前のことをどうやって文字におこせば良いのか分からず、あまりペンが進みませんでした。でも、クラスのみならずと過ごす日常を一步後ろに下がって見てみると、誰かのために、誰かと一緒に過ごしていくことが、どんなに幸せなことなのかを痛感させられました。太郎さんとコラボした詩の中に、私の考えた言葉がいくつかありました。…私は「今」がかけがえのない存在であり、それがどんなに苦しく辛いときだったとしても、いつか笑い話になる。そんなことに気づかされました。また、そんな一人一人の思いが詰まった詩を太郎さんのヴァイオリンとコラボしたときは、とても感動しました。太郎さんのまっすぐで響きのあるヴァイオリンと、温かくやさしい歌声には、とても圧倒されました。忘れることのないライブになりました。

■ 目が不自由なのに、こんなに精密な音から大胆な音まで出せてすごいなと思いました。太郎さんは元気いっぱい、周りの人に目が見えないことを忘れさせるほど、力いっぱい演奏していて楽しそうにも見えました。「盲目」という一種のハンディキャップのようなものを、自分の強み、アドバンテージとして活かしている太郎さんの姿がそこにありました。その太郎さんの強さから勇気と希望をたくさんもらいました。



太郎さんの演奏と全校生の校歌斉唱のコラボ
指揮は3年鈴木遼介君、伴奏は近藤凧さん。



■ 音に深みがあって、説得力がありました。力強く訴えてくるものを感じました。私は、吹奏楽部でフルートを吹いています。練習では楽しいと感じることが多いのですが、本番では思うように楽しめず緊張してしまいます。また、音楽を奏でることで伝えたいことを伝える、音楽にメッセージをのせて演奏することも、まだ私は思うようにできません。しかし、太郎さんの演奏には伝えたい思いがまっすぐに伝わってきました。曲によって、“やさしく包み込むようなイメージ” “明るく陽気なイメージ” “前向きで希望のあるイメージ” など、様々な色をしたメッセージが私に届きました。そして、何よりもヴァイオリンを奏でる太郎さんがとても楽しそうで、聴いている私も楽しくなりました。以前、太郎さんが「音楽で絵を描きたい」とおっしゃっていると学校だよりで知りました。よく部活で私も講師の先生に同じことを言われるなと思いました。「音楽で動く絵を描いて、自分はその絵の何になるかを考えよう」と講師の先生が言ったことがあります。フルートだったら蝶や小鳥、風。チューバは大地、海。トランペットは太陽や主役の動物、人などと…みんなで音楽という1枚の動く絵をつくるというイメージです。しかし、太郎さんは一人で1枚の絵をつくりだしました。そして、その絵は私の心にしっかりと届きました。本当に太郎さんの音楽をつくり出す力、エネルギーが大きく強いのだと感じました。



1年生

■ ヴァイオリンの演奏は鳥肌がたってしまうような、すばらしいという言葉で収まらない完璧と聞いていいほどで、聴いてとても感動しました。手拍子をして、太郎さんと一緒に音楽を奏でている時は、体育館の中にいる人全員とつながっているような一体感を楽しむことができました。

■ 太郎さんのヴァイオリンを聴いて、一番最初に「優しくてみんなを包み込むような音色だな」と思いました。よく楽器の音色は演奏している人の性格が出ると聞いたことがあります。なので太郎さんは本当に優しい方なんだなと感じました。今回の太郎さんのライブで、自分は“こうだからできない”と考えるのではなく、自分は“こうだからこれならできる”という考えの大切さを学びました。そして、笑うととても楽しい気持ちになります。なので私も、太郎さんのようにはいかないけど、周りの人を笑顔にしたいなと思いました。

■ 演奏曲は特に「ぼくにはきみがいる」が印象に残りました。歌詞や太郎さんの歌声と演奏すべてが美しく混ざり合っていてすごかったです。個人的にこの歌詞には、「大切な人がいることを幸せに思う」そんなメッセージが込められていると思いました。また、人生の枝分かれの話はすごく心に残りました。僕は今まで失敗から始まる転落のことばかり考えて、挑戦をためらっていました。「ここで失敗したら、みんな僕をダメな奴だと思ってしまう」とかそんなことばかり考えてしまっていました。でも太郎さんの話を聞いて、「そんなことはない」と思えるようになりました。失敗しても、その後には出会いも別れも何千、何万通りの道があって、きっとどんな僕にも信じてついてきてくれる人がいるって心から思えるようになりました。大切なのは、失敗の先にある幸せを掴むことだと思えるようになりました。僕はまだまだ人生発展途上の未完成人間だけど、これからたくさんの選択を超えて、太郎さんのようになりたいです。上手くいかないことのほうがたくさんあると思うけど、じぶんを生きたいと思います。そう思えたのも太郎さんのおかげです。

2年生頑張りました！

今回の教育講演ライブでは、受験モードに突入した3年生に代わって2年生が大活躍でした。2年生全員で作り上げた詩《生きる》。それを群読した6名の生徒達。そして、会の運営を務めたのが生徒会役員の生徒達でした。(1年生も3名います。)松崎結さんの進行は、とてもスムーズでした。会長の凌りくさんの「お礼の言葉」も素晴らしいものでした。太郎さんとマキさんの作品や過去の演奏にも触れながら感謝の意を表すとともに、2年生で進めてきた詩の創作や今回のライブのテーマ《じぶんを生きる！》に対する自分の考えなどを、原稿を見ずに伝えることができました。太郎さんやマキさんもとても感激していました。凌さんの感想です。



私が一番印象に残っているのは、曲はもちろんですが、太郎さんの「笑顔」です。ヴァイオリンを弾いている時も、しゃべっている時も常に自分自身が笑顔でいることで、周りの人を笑顔にしている、とてもかっこいいなと思いました。私もつられて笑顔になりました。60周年を迎えた小原田中学校の生徒であることを誇りに思うと同時に、とても幸運だなと思いました。群読とヴァイオリンのコラボを聴いた時、本当に泣きそうでした。群読の人達と太郎さんの思いがひとつになって伝わってきたからです。一つ一つの言葉が心に刺さり、感動しました！